朝焼けの前に

Hiraren

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
朝焼けの前に

【Ｎコード】
Ｎ５１０３ＢＡ

【作者名】
Ｈｉｒａｒｅｎ

【あらすじ】
不毛な青年と夜の街。
それだけ言っておけば、わかってもらえる世界だと思います。

その日はいつもよりもわずかに気温が低かったと思う。
古い友人と再会して軽く酒を飲んだ後、見事に終電を逃してしまったというパターンだ。その友人はというと、終電の遅いＪＲ線で意気揚々と帰宅したわけだ。
乗り換え先の終電を逃してしまったわたしは、帰ることが出来なくなり、仕方なく現地である池袋に残ったというわけだ。――とは、言っても、繁華街で一人残されたわけで、行く先もなければ予定もない。
ただ淡々と時間だけを潰してゆく作業が待っている。
冬の寒さも一段と厳しさを増した時期である、どこか暖かいところに逃げたい気持ちでいっぱいだった。
そこでわたしは女性を買った。
深い考えはない。財布と相談した結果、簡単に一時間と言う時間を消費する術を、女性を取り扱う店に任せただけだ。そのような下賤な店に行って迷惑が掛かる親密な異性もいないし、違法行為を進んで行うわけでもない。
しいて負い目を言うならば、冬の寒さが自分の心の隙間を少しだけ広げてしまったからであろうか。
夏の太陽がそうさせるように、冬の月はわたしの心を冷たくしたのだ。

わたしが店を出たのは深夜一時を少し過ぎたころだった。
終電が終わり、駅前にごった返していた人たちがわずかに退いてゆく頃だ。売春街が近いせいもあって、わたしが居た場所にはひと気と言うよりも客引きの人間が目立っていた。こんな所で腕を組んで歩くカップルは、この時間帯には少ない。

ジャケットのポケットに手を突っ込んで、肩を寄せて歩き出そうとしたとき、わたしはふとその存在に気付いた。
物陰で身を丸めていた猫のように、彼女はシャッターの前で膝を抱えてわたしを見ていた。
それが、彼女との出会いだった。

「時間、ありますよね」
彼女はそういった。
髪を黄色に染めて、口からは酒の匂いが、服からはタバコの匂いがした。
時間はない――というわけではない。あと五時間は自分自身も暇なのだ。しかし、面倒ごとはゴメンだなあ、と思っていると、彼女は再び声を尖らせた。
「お願い、少しでいいから一緒に居てくれない？」
だいぶ積極的な娘だなと思った。酒のせいか、それとも性格なのか――どちらにしても、他に仲間が居て罠にかけられるのは面倒だと思った。
それでも、彼女がおおきくくしゃみをして、突然泣き出してしまった時には罠の存在を疑う気持ちはわずかに薄れていた。
わたし達は近くのファミレスに入った。
泣いた女を引き連れてきたわたしに、店員は変な顔ひとつしなかった。この街はそのような事態に慣れているのだ。そう思った。
しばらく泣き続けていた彼女は、注文した紅茶を飲むなり次第に落ち着きを取り戻し始めた。わたしもコーヒーを啜りながら、「どうしたの？」の一言を発するタイミングを探していた。
ゆっくりと落ち着き始めた彼女は、こちらが聞く前に「フラれたの」と教えてくれた。
「なるほどね、失恋か」
同じテーブルに座っているのに、ここまで他人行儀に言葉を返し

たのは初めてだった。それだけ彼女とどうこうなりたいという思いがわたしにはなかった。ただ行きずりの出会いで、行きずりの別れが待っているだけ。そうであって欲しいし、変に深く関わりたくないというのが本音だった。

眼の前でえぐえぐとフラれた事に傷ついている女の子がいる。

ほとんど一方的に過去を悔いるように喋る彼女に、私はあまり深く訊く耳を持たなかった。簡単な相槌と返事を返すだけ。

それでも彼女にとって本当に大切な人が、あっけなく去っていってしまった、と言うことは把握できた。

恋とは難しいな、と思いながら腕時計に目を向ける。まだ四時間半も時間があった。

出会った彼女は眼を真っ赤にして、携帯電話をいじる。誰かに連絡を送っているのか、はたまた違うことをしているのか、わたしの位置からではわからなかったし、わかろうとも思わなかった。

また彼女は鞄から薬を取り出して飲んでいた。それが風邪薬なのか、向精神薬のようなものなのかはわからない。繰り返しになるが、わかろうとも思わない。そんな彼女の行動にわたしは陰鬱な気持ちになった。

見ず知らずの病み女につかまって、あろうことか深夜のファミレスで二人きりだ。もしかしたら荻窪のイラン人と友達なのかもしれない。はたまた新宿の暴力団の女かもしれない……そうでなくとも、おつむの足りていない若者の遊び道具なのかも……。

そんな懸念があちこちに駆け巡った瞬間だった。

そう思うといじっている携帯電話の内容がとても気になった。

――いいカモを見つけた。なんて送っているのではないだろうかと思ったからだ。

携帯電話をテーブルに置いて、彼女はじっと顔を見つめるわたしを見返してきた。

「……なに？」

「なにっていうのはこっちが聞きたい」

「フラれた。傷ついてる。一人でいたくないの」
淡々と要件だけをぶつ切りにして彼女は答える。
わたしは頭を抱えたくなったが、「失恋は災難だ。俺にもそういう経験はある」と答えた。火に油を注ぐ結果になりそうな発言だったかもしれないが、彼女はなにも答えなかった。
「忘れたものを探しに行ったの」
「……は？」
「でも、見つからなかった。途中にはいっぱい失ったものが落ちていたけど、忘れたものを見つけられなかったら、それは全部ガラクタで、わたしの思い出にもならない」
ただの足枷みたいなもの。
彼女はそういって再びわたしを強く見据えた。
まるで降って沸いたような言葉――どこから受信した電波なんだと思った。しかし、彼女はしっかりとわたしにわかる言葉で本音を述べた。

「――思い出を捨てに行きたいの」

なるほど、と思う。
わたしも別れた異性との品々はあまり見たくない。出来るだけ綺麗サッパリ処分する――ように努めている。彼女がどんな男とどんな事情で付き合っていたのか――もしくは関わっていたのかは知らない。けれども別れがもたらす悲しみは少なくとも共感できる。
輝かしい温かい思い出が、冷たい石のような存在に変わってしまう瞬間も――わかる。
「捨てに行こう」
「行ってくれる？」
「近くのゴミ捨て場に捨てちまえ。そんなもん」
軽く笑って、ゴミ捨て場で彼女と別れて――わたしは始発電車が出るまで違う場所で時間を潰すことを考えていた。しかし、彼女は

顔を左右に振った。
「――海がいい」
そう言った。

白いハイエースワゴンを借りた――正確には彼女がすでに借りていた。
元々ファミレスで携帯電話から予約を入れていたらしい。近くのレンタカーショップで車を借りて、二人は海岸を目指した。
もしわたしが車の免許を持っていなかったらどうするのだろう。もしわたしが血迷って田んぼや森の茂みに車を停めて暴力を振るい出したらどうするのだろう――。そんな事を考えられないヒトなのか、考える余裕すらないぐらいショックを受けているのか……わたしにはわからない。
それにわたしは暴力を振るうつもりも襲うつもりもない。その時になって、初めて風俗店で一服した事が事件を起さない抑制剤になったのかもしれない、などという途方もない考えに至った。
どちらにせよ、わたしは彼女を襲ったりしない。
助手席で携帯電話を握り締めて、一定の速さで夜のライトをくぐる彼女の顔を盗み見た。
なんだ、黙ってれば少しは可愛いじゃないか。
そう思いながら、わたしは車を更に進めた。

池袋からとある海岸へ出るのに、一時間半ほど掛かった。深夜だったので車もさほど多くなく、ひっそりとした道を二人は進んだ。
高速道路は使わずに下道を出来るだけゆっくりと、そして慎重に走っていた。
考えてみればわたしは酒を飲んでいた。風俗店に入る前、古い友達とそれなりに飲んだはずだったのに、酔いはすっかり薄れていた。

本当はいけないことだし、いますぐにでも車を停めなくてはならない。それなのに、車を停めなかった。
「眠くないか？」
声を掛けながら、まるで二人だけの世界を進んでいた。
対向車もなければ歩行者もない。警察車両はもちろんないし、信号だって赤から黄色に変わる勢いだ。
これは夢なのではないだろうか。
酒を飲んだのに、まったく酔っていない。でも、飲酒検査をしたら間違いなく酒が入っていることがバレる。けれども、その世界では誰も飲酒検査を要求してくるものは居なかった。
不思議だった。
とても不思議な時間だった。
隣に座っている見ず知らずの女の子に再び目を向けたら、彼女がキツネになっているかもしれない。それでも、わたしはきっと驚かない。ああ、やはりそうなったか、と納得がいくような気がしたぐらいだ。
そんな風に車は進んだ。
海が見えたとき、彼女は「うみだ……」と小さく呟いた。
防波堤の向こう側には波消しブロックがひしめき合っていて、とても素敵な海岸線とは言えなかったし、波だって少し荒れているように見えた。
わたし達は車を停めて防波堤の前に立った。
すると彼女は「ありがとう」と言った気がした。その声は海風と波音で綺麗に掻き消されてしまったようだった。
しばらくわたしは海を見つめていた。
久しぶりに見た海は、驚くほど乱暴で暗い色をしていた。
月もなければ、雲の多い空だった。
彼女は車からバックを持って来て、中に入っていた捨てたい思い出の品々を海に投げ始めた。
「バカー！」とか、

「死ねーっ！」とか、
「大嫌いになったんだからーっ！」とか。
いろいろと叫んでいた。
叫んで、泣いて、ときおり声を風に掻き消されて、すべてを吐き出しているようだった。
そんな彼女から尻目に、わたしは海岸沿いの住宅街を見ていた。
深い意味はない。数時間前に風俗店へ入ったときのように、何気なく潮風に錆びあがった家々の軒先や看板を目でなぞった。
しばらくすると、彼女は息を切らせてわたしの元へもどってきた。
「終わったか？」
「……うん、終わった」
「じゃあ、帰るぞ。今日は予定があるんだ」
「わたしも予定あるの。早く帰ろう」
なんなんだ、この娘……と思いながらも、わたしは腕時計に眼を配った。
用事までまだ時間はたっぷりある。ゆっくり走っても十分に間に合うほどだ。
わたし達が車に乗り込もうとしたとき、彼女は「あっー！！！」と大声を上げた。
「どうしたんだよ！？」
「け、携帯……投げちゃった……」
「はっ？」
彼女は少しだけ赤くなり始めた海を指差して、「携帯、取ってきて」と言った。
――冗談だろ、おい。
わたしは防波堤に身を乗り出して携帯電話を目で探す。
まだまだ暗い夜空のもとで、携帯電話がどこにあるかなどわからない。
わたしは自分の携帯電話を手渡して、「自分の携帯番号わかるか？」と訊いた。彼女はわかると言ったので、「電話をかけて呼び続

けろ。海水で死んでなかったら場所が分かる」と言い残して防波堤を飛び越えた。
波消しブロックのイビツな形に足をとられながら、携帯電話を探した。
たぶん見つからないだろう。そう思いながら波消しブロックの上を注意深く歩いていると、近くでなにかが動く音が聞こえた。目を向ければ、そこには虹色に光る携帯の液晶が見えた。背がひかり、小刻みに震えている。
「あった……！」
ブロックに横ばいになって、わたしは腕を伸ばした。偶然にも途中で引っ掛かっている携帯電話を、誤って海に落としては大変だ。
わたしは慎重に手を伸ばして、携帯電話のストラップをしっかりと握った。
「見つけたぞ！」
そう言って再び彼女の元へもどると、「ありがとう……」と小さな声で答えてくれた。
「帰ろう。池袋でいいか？」
「……うん、そこでいい」
わたし達は車に乗り込んだ。
携帯電話は海水に浸かっていなかったし、壊れている様子はなかった。
帰り道、わたし達は車内で一言も口を利かなかった。
彼女が眠ったわけでもないし、わたしも怒っていたわけではない。ただ、なにか話す種がなかったのだ。
そんな沈黙が一時間以上ほど続いて、わたし達はレンタカーショップに車を返した。
すっかり始発の始まった池袋の駅前で、彼女と別れた。
特にこれと言った挨拶もしなければ、メールアドレスや電話番号も交換しない。
「じゃあ、また」

「うん、またね」
と、親しい知り合いとすぐに再会するつもりでわたし達は別れた。
それだけ親身な時間を過ごしたのだといわれればそうかもしれないし、疲れ切っていたのだといわれればそうだ。
そのまま、わたしは約束をしていた友人の元へ向かった。

その日に会う約束していた友人は徹夜をしたわたしに深く事情を聞いてこなかった。
ただ、一言だけ――、
「キミ、磯臭いけれどもなにかあったのかい？」とは言われた。
ファミレスで会話をしながら、ふとわたしは気付いた――発信履歴に彼女の電話番号があるのではないだろうか、と。
調べてみると予想通りあった。
〇九〇から始まる知らない番号――。
たぶん、電話をかければあの娘に通じるだろう。
名前も出身も学生か否かも、年齢も知らない、風俗店を出たときに目があって、そのまま海へ行った、失恋したての女の子に。
わたしは友人に聞いた。
「――キミは初対面の人間を信用するかい？」
すると彼は笑う。
当たり前なことを訊くんじゃない、と言わんばかりで。
「キミと同じで信用しないね。それがどうかしたかい？」
「……いや、久しく聞いていなかったから、もしかしたら価値観が変わったかと思って」
そう答えた時には、その発信履歴を綺麗に消していた。
一夜を共にした彼女は、本当に一夜だけの関係になった。
でも、その方がよかったと思う。
うだうだと深い関係になったら、昨晩の不思議な夢のような思い出は、きっとリアルな現実に近づいてしまうような気がしたからだ。

名前も歳も知らない、見ず知らずの娘……。
そんな彼女はいまもどこかで生きているだろう。
もしかしたら、本当にまた池袋で再会するかもしれない。
でも、そんな事はないだろう。
だからこそ、あの日の出会いは永遠の思い出になるような気がした。

悪くなく、良くもない、不思議な思い出に――。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5103ba/

朝焼けの前に

2012年1月14日01時47分発行